

特定の家族背景をもつ子どもに対する保育者のイメージ

白 神 敬 介*・岡 本 和 花**

(令和3年9月15日受付；令和3年11月19日受理)

要 旨

本研究では、多様な家族背景に対して保育者がもつイメージを調査し、イメージの偏りや偏見との関連性について検討することとした。調査では、貧困家庭・外国につながるのある家庭・虐待家庭・死別家庭・親に精神疾患のある家庭を取り上げ、アンケート調査のSD法によりイメージの測定を実施した。結果より、「理想」の家族背景に比べると、すべての家族背景がネガティブなイメージで捉えられる傾向がみられた。特に、外国につながるのある家庭や貧困家庭に対しては、自由で気ままなイメージがみられ、虐待の家族背景に対しては、規則に厳しいといった不自由なイメージで捉えられている傾向がみられた。クラスター分析によって保育者が抱くイメージの個人差を分析した結果、全体的な傾向とは異なるイメージをもったグループの存在が確認され、特徴的なイメージを構成するグループにおいては偏見的な態度との関連性が示唆された。また、アンチバイアス教育等の保育実践を進めるうえで、批判的思考を育むうえでの課題と、保育者のもつイメージの多様性を踏まえた取り組みの必要性についての議論を進めた。

KEY WORDS

children with international backgrounds 外国につながる子ども abusive family 虐待家庭 poor family 貧困家庭 anti-bias approach アンチバイアスアプローチ prejudice 偏見 semantic differential method SD法

1 問題と目的

保育・幼児教育においては、子どもだけでなくその家族も含めて支援の必要性が指摘され、そうした支援を適切に実行するための保育者の態度やスキルアップが必要とされている。特に近年では、保育・教育場面において外国につながるのある家族への対応や、貧困家庭への支援は重要な課題と位置づけられている⁽¹⁾⁽²⁾。また、親との死別や、親が精神疾患である等⁽³⁾の困難な状況にある子どもにおいては、その状況を踏まえたうえでの子どもや家族への支援が必要である。しかし、保育現場のなかではこれらの背景に特有の状況への理解や知識をもつことが困難であり、十分な支援が実施できない場合もある。

このような多様な家族背景を踏まえ、あらゆる子どもや家族が必要な支援を受けられる多文化共生社会の構築は大きな課題であり、保育・幼児教育においても重要な位置づけをもつ。こうした社会の実現に向けて、多文化保育・教育、国際理解教育、アンチバイアス教育、インクルーシブ教育といったそれぞれ異なる定義であるが、部分的な重なり合いをもった研究や取り組みがなされている⁽⁴⁾。特定の子どもや家族が差別や偏見にさらされることなく、より良い生活を営むためには、こうした取り組みや考え方が日本の保育・幼児教育の現場に浸透していくことが望ましいと考えられる。しかし、これらの取り組みが十分に機能するためには、保育・幼児教育の実践者である保育者の理解が重要である。保育現場においてこうした家族背景に特有の状況への理解や知識が十分に共有されているとはいい難く、保育実践において異文化や多文化への認識は希薄⁽⁵⁾という指摘もみられた。

保育・幼児教育現場においては、さまざまな家族背景への理解のうえで、すべての子どもへの公平かつ適切な関わりが求められる。ゆえに、保育者において特定の家族背景への無理解や、偏ったイメージ、偏見が存在することは望ましいものではない。たとえば、海外の調査では、教師がマリノリティの背景をもつ子どもに偏見をもち、差別的な扱いがみられることが報告された⁽⁶⁾。また、教師が生徒に対して抱く期待や偏見は学習者の発達過程に悪影響を与え、学習への熱意をくじき、発達を制限する可能性がある⁽⁷⁾。保育者がなんらかの背景をもつ子どもや家族に対して偏ったイメージや偏見をもつならば、それを是正していくことが求められる。そのために、保育者がそれぞれの家族背景に対して抱く認識の実態を把握することが必要である。

そこで、本研究では、多様な家族背景に対して保育者が抱くイメージを調査し、イメージの偏りや偏見の実態につ

*学校教育学系

いて把握することを目的として、いくつかの家族背景をもつ子どもに対する保育者のイメージを検討することとした。また、家族背景に対するイメージは、必ずしも集団全体で統一的なイメージが形成されているとは限らないと想定し、全体的なイメージの様相を踏まえながら、保育者一人ひとりのもつイメージの相違に着目できるよう分析を進めることとした。保育者のもつイメージの共通性と相違を見出すことで、それぞれの保育者が特定の家族に対して抱くイメージや理解を踏まえて、より適切な支援を実施するための学習・研修内容について検討を進めることができるのではないかと考えられる。

2 方法

2. 1 調査対象者と手続き

2020年1月に、株式会社クロス・マーケティングの調査モニター（2019年9月末日時点で約420万人）のうち、18歳以上の保育士であるモニター700名を対象とした自記式のWebアンケート調査を実施した。なお、本調査における保育士を「回答時点で保育士として業務に従事しており、保育士資格あるいは幼稚園教諭免許状、もしくは両方を有する者」と定義した。

調査の進め方としては、未回答の項目がある場合には次の回答へ進めないような設定をした。したがって、有効回答であった全モニター700名が調査協力者となった。

2. 2 調査内容

調査内容は、「特定の家族背景へのイメージ」に加え、偏見に関連する態度を測定するための偏見の程度に関する「偏見の強さ」と自覚的な偏見に関する「偏見の自己認知」、そして、回答者の属性の項目により構成した。

1) 特定の家族背景へのイメージ (SD法)

特定の家族背景のある子どもへのイメージを調べるため、満下・井出の調査⁽⁸⁾を参考に、麻喜の研究⁽⁹⁾で用いられた家族イメージ尺度におけるSD法による8項目の質問項目を作成した。

本研究では、貧困家庭（貧困）・外国につながるのある家庭（外国）・虐待家庭（虐待）・死別家庭（死別）・親に精神疾患のある家庭（精神疾患）に加えて、比較検討のため望ましいと言える家庭（理想）の計6家族を対象としたイメージの測定を行った。特定の家族背景のある子どもへのイメージは、質問の教示文として各家庭の様子を記述した文章（表1）を示し、それぞれの刺激文に対して、イメージ（SD法）についての回答を求めた。刺激文の作成については、満下・井出⁽⁸⁾を参考とした。

2) 偏見関連尺度

偏見に関連する態度を測定するため、「偏見の強さ」を測定するために向田⁽¹⁰⁾が作成した尺度のなかで「堅固な保守的態度」「外国人・ホームレスに対する偏見」「外見・肩書による差別傾向」と命名された3つの因子に関する27項目を用いた。各回答には、「まったくあてはまらない」から「非常にあてはまる」の6件法を用いた。

また、自覚的な偏見の有無を尋ねるため、「偏見の自己認知」として、「自分が他の人々に対する偏見をもっていると思うか」という問いを設定し、「非常にそう思う」から「全くそう思わない」の5段階評定に「わからない」を加えた6つの選択肢への単一回答により回答を求めた。

3) 対象者の属性

調査対象者の属性として、「勤め先」「勤務形態」等について尋ねた。「勤め先」として現在、勤めている施設の種別を尋ね、選択肢は、「保育所」「幼稚園」「認定こども園」「児童養護施設」「その他」とした。「勤務形態」の設問では「正規」「非正規・臨時」を選択肢とした。

2. 3 倫理的配慮

本調査における「回答上の注意事項」として、以下の3点について調査協力者に示した。第一に、調査への協力は任意であり、回答の拒否や途中離脱をしても不利益を受けることがないこと、第二に、調査で得られた個人情報はすべて統計的に処理され、個人情報の保護に最大限の配慮をすること、第三に、調査で得られたデータは研究目的以外で使用されることはなく、個人を特定できる情報は公表しないことの3点であった。

本調査の実施に先立ち、2019年10月30日に著者所属機関による承認を得た（承認番号：2019-58）。また、株式会社クロス・マーケティングの定める個人情報の取り扱いについての規定に則り、調査対象者の合意を得て匿名にて調査を実施した。

2. 4 分析方法

分析前に、リッカート尺度を回答選択肢とした「偏見の強さ」「偏見の自己認知」の項目におけるそれぞれの回答結果の得点化を行った。「偏見の強さ」では「まったくあてはまらない」を1点、「非常にあてはまる」を6点として得点化した。つまり、得点が低いほど回答者のもつ偏見は弱く、高得点ほど回答者のもつ偏見が強いことを意味する。なお、逆転項目については、「非常にあてはまる」を1点、「まったくあてはまらない」を6点とした。分析においては、先行研究の因子構造に則って得点化し、分析に用いた。

「偏見の自己認知」では、「偏見の強さ」における得点の意味する内容と整合性がとれるように、回答者の偏見の自己認知が低いほど低得点、自己認知が高いほど高得点を意味するように回答結果を得点化した。したがって、「全くそう思わない」を1点、「非常にそう思う」を5点とした。本研究では「わからない」と回答したものは除いて分析を実施した。

統計解析には、IBM SPSS Statistics (Version23) を用いた。

表1. 特定の家族背景に関する刺激文

理想	Aは幼稚園の5歳児クラスの子どもです。Aは、誰が見ても望ましいと言える家庭で生活しています。
貧困	Bは幼稚園の5歳児クラスの子どもです。Bは両親と暮らしていますが、経済的にかなり厳しく、生活保護を受給する程度の貧困状態にある家庭で生活しています。
外国	Cは幼稚園の5歳児クラスの子どもです。Cは外国で生まれたため外国籍をもち、一年前に両親が日本に移住したため、両親と日本で生活しています。
虐待	Dは幼稚園の5歳児クラスの子どもです。Dは両親と暮らしていますが、片方の親からの虐待が疑われる家庭で生活しています。
死別	Eは幼稚園の5歳児クラスの子どもです。Eは一年前に片方の親と死別しており、今はもう片方の親と共に生活しています。
精神疾患	Fは幼稚園の5歳児クラスの子どもです。Fは両親と暮らしていますが、片方の親に精神疾患の症状がみられる状況の家庭で生活しています。

表2. 尺度相の因子負荷行列 (バリマックス回転)

	第1因子 「きずな感」	第2因子 「柔軟性」
冷めた —— あたたかい	0.980	0.104
ドライな —— 愛情のある	0.949	0.119
冷淡な —— やさしい	0.888	0.163
孤独な —— 楽しい	0.758	0.092
厳格 —— おおざっぱな	0.113	0.917
厳しい —— 放任の	0.099	0.887
規則に縛られた —— 勝手気ままな	0.048	0.863
規則を曲げない —— ルールのない	0.201	0.741

3 結果

調査で得られた700名を分析対象とした。対象者の勤め先は、保育所480名 (68.6%)、幼稚園43名 (6.1%)、認定こども園102名 (14.6%)、児童養護施設10名 (1.4%)、その他65名 (9.3%) であり、勤務形態は正規354名 (50.6%)、非正規・臨時346名 (49.4%) であった。

3. 1 因子構造の確認

家族背景についてのイメージを尋ねた尺度の因子構造について確認的因子分析を実施した。調査対象者700 (名) × 8 (SD法項目) × 6 (刺激) の三相データを用い、Tucker⁽¹¹⁾ の提案した三相因子分析を実施した。その結果、2因子構造が確認され、先行研究と同様の結果が示された (表2)。そこで、先行研究と同様にそれぞれの因子を「きずな感」「柔軟性」と命名した。三相因子分析における信頼性係数は、きずな感で $\alpha = 0.945$ 、柔軟性で $\alpha = 0.918$ であった。

偏見関連尺度における「偏見の強さ」に関する3つの因子の信頼性係数を確認したところ、「堅固な保守的態度」

で $\alpha = 0.825$, 「外国人・ホームレスに対する偏見」で $\alpha = 0.839$, 「外見・肩書による差別傾向」で $\alpha = 0.731$ となり十分な信頼性が確認された。第1因子「堅固な保守的態度」は「若いというだけで未熟者だと考えてしまう傾向がある」「フリーターをしている人は信用できないと思う」「結婚したら, やはり女性は家事育児に専念すべきだと思う」などの項目で構成され, 第2因子「外国人・ホームレスに対する偏見」は「人を人種や国籍で判断することがある」「中東系の人を見ると, 何か悪いことをしているのではないかとつい疑ってしまう」「働かず怠けている人がホームレスになると思う」などの項目で構成され, 第3因子「外見・肩書による差別傾向」は「職業で, その人に対する評価が変わることがある」「容姿や体つきで, 人の性格を判断することがある」「相手の社会的地位の高低によって, 極端に態度が変わることがある」などで構成される。

3. 2 家族背景ごとの因子得点と相関分析

各家族背景に対するイメージを比較するため, 刺激(家庭背景)ごとに因子得点を算出した。それぞれの因子を構成する項目の単純な合計得点を用いる場合, 家族背景ごとに平均値・分散が異なるため直接の比較は不適当である。先行研究⁽⁸⁾に倣い, 対象者ごとの各家族背景への因子得点から「理想」家庭の因子得点の差を求めて標準化し, 「理想」を原点とした各家族背景の得点を算出した。

家族背景ごとの標準化得点を用い, 「きずな感」と「柔軟性」を2軸とする散布図を作成した(図1)。図1より, きずな感については理想に対して全ての家族背景が負の方向に布置され, 柔軟性については虐待以外の家族背景が理想よりも正の方向に布置されていた。

きずな感因子の得点においては5つすべての条件で「理想」条件よりも, 低い得点が示され, 特に「虐待」ではかなり低い得点であった。このことは, 「理想」条件が「やさしい」「あたたかい」「愛情のある」「楽しい」といったポジティブなイメージで捉えられる一方で, 「虐待」条件では「冷淡な」「冷めた」「ドライな」「孤独な」といったネガティブなイメージで捉えられていることを意味する。「精神疾患」「貧困」「死別」条件においてもこのような比較的ネガティブなイメージで捉えられていることが示された。また, 柔軟性因子の得点においては, 特に「外国」と「貧困」条件において高い得点がみられ, 「虐待」条件では負の得点がみられた。このことは「外国」「貧困」条件が「ルールのない」「放任の」「おおざっぱな」「勝手気ままな」といった柔軟で自由度の高いイメージで捉えられている一方で, 「虐待」条件では「規則を曲げない」「厳しい」「厳格な」「規則にしばられた」といった堅固で自由度の低いイメージで捉えられているといえる。

6つの家族背景における2つの因子得点と, 偏見関連尺度の相関係数を算出した。「堅固な保守的態度」に対して有意な相関が見られたのは「貧困・きずな感得点」($r = -0.18, p < 0.01$), 「外国・きずな感得点」($r = -0.15, p < 0.01$), 「死別・きずな感得点」($r = -0.09, p < 0.05$)「虐待・柔軟性得点」($r = 0.08, p < 0.05$)であり, 「外国人・ホームレスに対する偏見」に対して有意な相関が見られたのは「貧困・きずな感得点」($r = -0.15, p < 0.01$), 「外国・きずな感得点」($r = -0.14, p < 0.01$), 「死別・きずな感得点」($r = -0.11, p < 0.01$)であり, 「外見・肩書による差別傾向」に対して有意な相関がみられたのは「貧困・きずな感得点」($r = -0.13, p < 0.01$), 「死別・きずな感得点」($r = -0.07, p < 0.05$)であった。また, 「自覚的偏見」に対して有意な相関が見られたのは「貧困・きずな感得点」($r = -0.09, p < 0.05$), 「外国・きずな感得点」($r = -0.12, p < 0.01$), 「虐待・きずな感得点」($r = -0.08, p < 0.05$), 「死別・きずな感得点」($r = -0.09, p < 0.05$), 「死別・柔軟性得点」($r = -0.09, p < 0.05$)であった。偏見関連尺度と有意な相関が見られた変数はいくつかみられたが, いずれも弱程度の相関であった。

3. 3 家族背景イメージに対するクラスターの形成

家族背景に対するイメージの個人差を検討するため, クラスター分析を実施した。分析方法は, 家族背景ごとの2つの因子得点による計12の変数を分析対象として, ユークリッド距離を用いたWard法による階層的クラスター分析であった。分析結果をもとに10のクラスターを得た。本調査では, できるだけ家族背景に対する個々の対象者のイメージの相違を捉えたうえで, 類似のイメージ傾向をもつグループの分布を検討するため, 比較的多数のクラスター数を採用することとした。各クラスターに含まれる対象者の数(n)は, クラスターA=7, クラスターB=11, クラスターC=271, クラスターD=38, クラスターE=44, クラスターF=55, クラスターG=100, クラスターH=15, クラスターI=82, クラスターJ=77であった。これらの10クラスターを用い, 「きずな感」と「柔軟性」の標準化得点を用いたバブルチャートを作成した(図2)。図2からは, 図1に示された布置と同様の傾向が見られる一方で, 特に小規模のクラスターにおいて, 図2とは異なる布置が見られ, 必ずしも全体的傾向とは一致しないイメージをもつ保育者の存在が示唆された。

まず, 家族背景ごとのクラスターの配置に注目する。「理想」条件においては, 複数のクラスターが近接したまと

まりが縦軸を挟んだかたちで大きく二つみられる。これは「理想」条件ではきずな感の得点について、クラスターB, F, G, H, I, Jから構成される特にポジティブなイメージをもつ対象者のまとまりと、そこまでポジティブなイメージをもつとはいえない比較的中立的なイメージをもつクラスターC, D, Eの対象者に分かれているといえる。また、「外国」条件では、いずれのクラスターも比較的中立的な位置で配置されており、多くの対象者は「外国」条件について類似のイメージをもち、それは比較的中立的なものであると考えられる。「虐待」条件では、横軸を挟むかたちで対称的な配置がみられ、「虐待」に対しては、柔軟性についての真逆のイメージが存在している可能性がある。

各クラスターの特徴に着目すると、クラスターCは最大的人数で構成されており、いずれの家族背景においてもきずな感と柔軟性の得点は安定した同じ得点を示す傾向がみられる。クラスターCは比較的中立的なイメージで各家族背景を捉えていると考えられるため、クラスターCよりも遠い位置にあるクラスターほど、より強いイメージをもつ傾向にあると解釈できる。クラスターJは比較的多数の人数で構成されるクラスターで、「虐待」条件以外の家族背景に対しては、きずな感において相対的に正の得点を示す傾向がある。きずな感の因子得点が高い場合、「やさしい」「あたたかい」「愛情のある」「楽しい」といった回答選択肢を回答する傾向が高く、クラスターJは虐待以外の家族背景に対してよりポジティブなイメージをもっているといえる。クラスターAはいずれの家族背景においても、きずな感、柔軟性ともに大きな負の値を示す傾向がみられた。これについてはどの家族背景に対しても、ネガティブなイメージをもっていると解釈することはできるが、「理想」条件においてもネガティブなイメージであるため、不良回答もしくはsatisficeな回答をしたグループである可能性が高い。一方、クラスターBは「理想」と「外国」条件を除いた4つの家族背景に対してきずな感と柔軟性の両方で大きな負の得点を示しており、「貧困」「虐待」「死別」「精神疾患」に対してネガティブなイメージをもつ傾向があると考えられる。クラスターHは、「貧困」「虐待」「死別」「精神疾患」において、他のクラスターから離れた位置にあり、特徴的なイメージをもつ対象者で構成されているクラスターと考えられる。特に、「貧困」「虐待」においては高い柔軟性得点がみられる。柔軟性因子では「ルールのない」「放任の」「おおざっぱな」「勝手気ままな」の選択肢を評定するほど得点が高いため、これらのイメージを「貧困」「虐待」の家族背景に対して抱いていると考えられる。一方で、クラスターJは、「貧困」「死別」「精神疾患」に対して、柔軟性因子で比較的高い負の得点傾向を示しており、クラスターHとは相反するイメージを「貧困」「死別」「精神疾患」の家族背景に抱いていると考えられる。

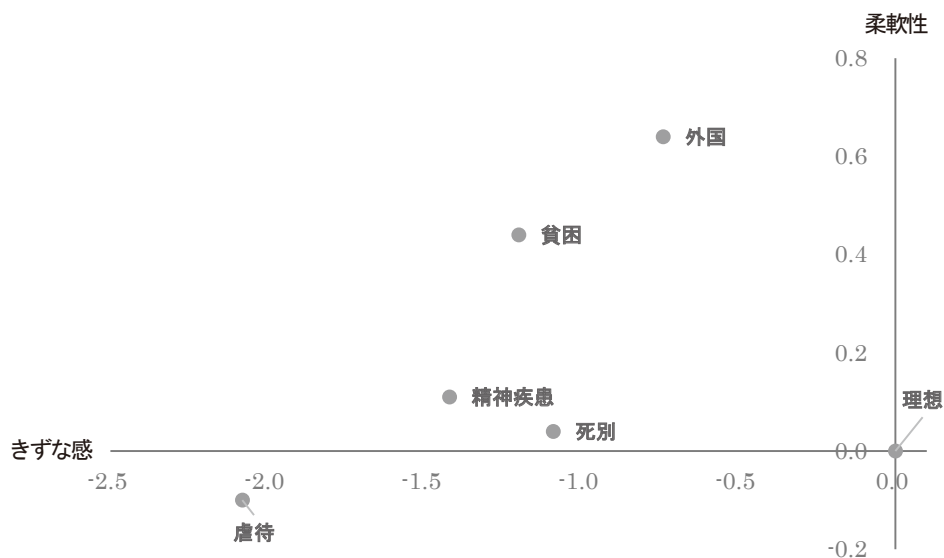


図1. 各家族背景のイメージ散布図

3. 4 クラスターごとの偏見関連尺度得点

独立変数をクラスター、目的変数を各尺度得点として、一要因分散分析を実施した。「堅固な保守的態度」($F(9, 690) = 2.82, p < 0.01$)と「外見・肩書による差別傾向」($F(9, 690) = 2.69, p < 0.01$)、偏見の自己認知($F(9, 674) = 2.34, p = 0.01$)においては有意差がみられ、「外国人・ホームレスに対する偏見」($F(9, 690) = 1.41, p = 0.18$)では有意差はみられなかった。有意差がみられた場合には多重比較(Tukey HSD)を実施した(図3)。多重比較より、いくつかのクラスター間で有意差が認められた。

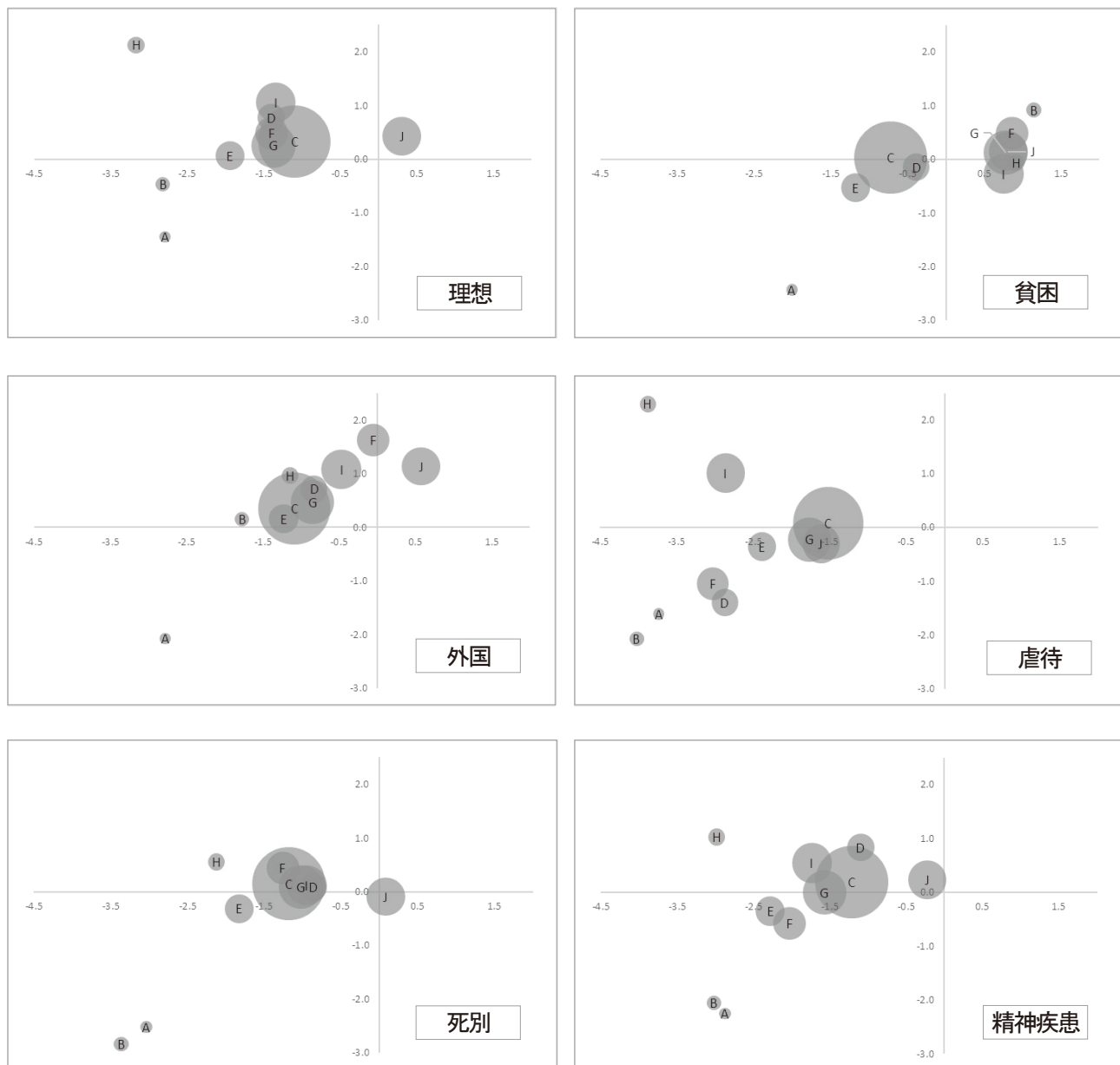


図2. 各家族背景に対するクラスターごとのイメージ散布図

注) 図中の縦軸は「柔軟性」、横軸は「きずな感」を表し、バブルの大きさは各クラスターを構成する人数(n)を表す

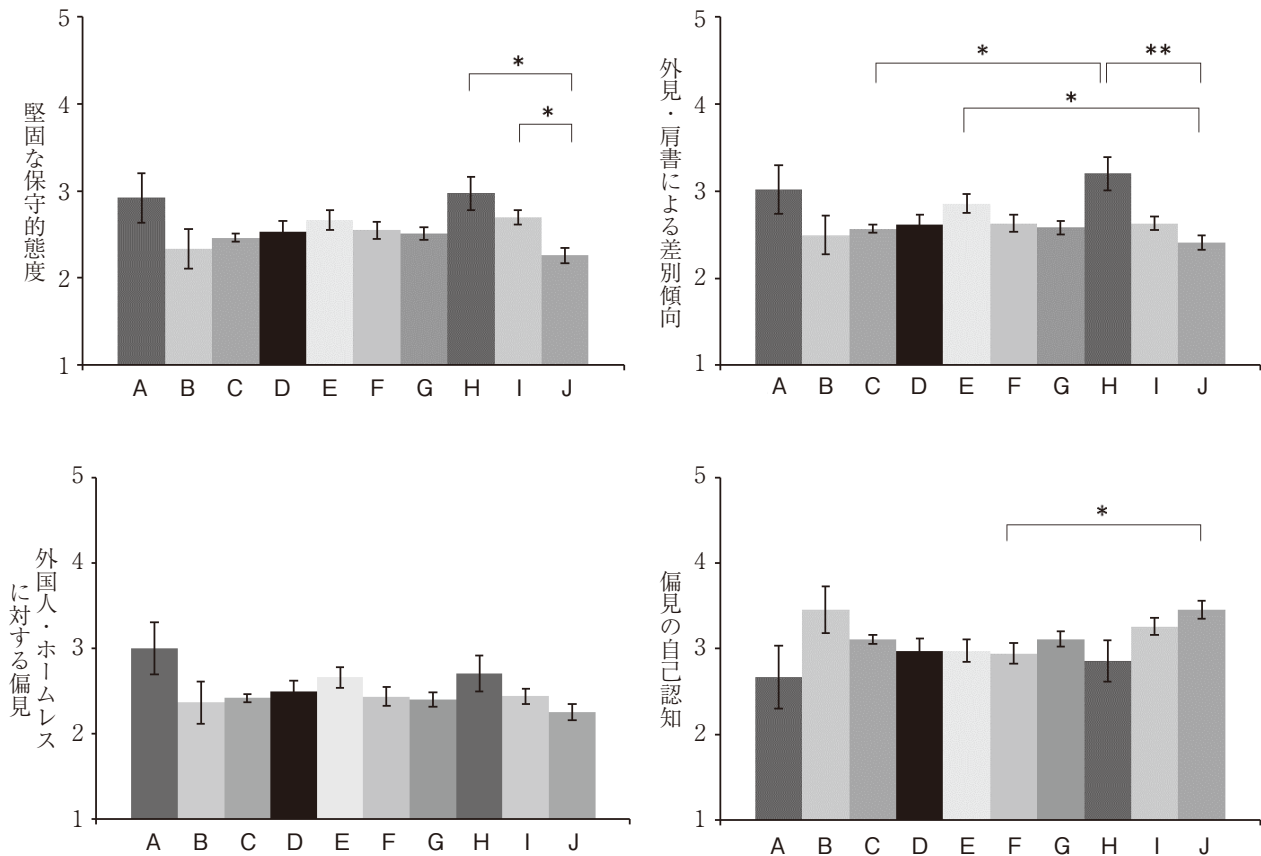


図3. クラスターごとの偏見関連尺度の平均値

注) * $p < .05$, ** $p < .01$ 図中のエラーバーは標準誤差を示す。

4 考察

4. 1 分析結果のまとめ

本研究では、保育者を対象として6つの家族背景に対するイメージを調査した。家族背景に対する全体的なイメージとしては、「理想」条件を基準として見た場合、他の5つすべての条件でイメージの偏りがみられた。具体的には、きずな感因子より、理想を示す家族背景が愛情やあたたかみのあるといったポジティブなイメージで捉えられる傾向に対し、他のすべての家族背景に対してはドライで孤独といったネガティブなイメージで捉えられる傾向にあった。また、柔軟性因子から、外国につながりのある家庭や貧困家庭に対しては、放任、ルールのないといった自由で気ままなイメージで捉えられる傾向に対し、虐待を示す家族背景に対しては、規則にしばられ、厳しいといった不自由なイメージで捉えられている傾向がみられた。また、これらのイメージと偏見に関する尺度得点との相関を検討したところ、多くの変数間で有意であるもののいずれも弱い相関であった。そのため、こうしたイメージは必ずしも偏見に関連しているわけではないと考えられる。

しかし、それぞれの対象者が抱くイメージの個人差に着目するため、クラスター分析によってイメージの異なるグループに整理し分析を進めたところ、全体的な傾向とは異なるイメージをもったグループの存在が確認された。特に「虐待」家族背景に対しては、柔軟性因子において相反するイメージをもつグループの存在が認められ、虐待家庭に対しては自由で気ままなイメージと、規則にしばられ、厳しいイメージの相反するイメージが存在していることが示唆された。また、「貧困」「精神疾患」「死別」に対しては、きずな感因子において全体的な傾向とは異なるイメージをもつグループの存在が認められ、特にクラスターJのようにポジティブなイメージを抱く傾向のあるグループの存在もみられた。クラスターごとの特徴に注目すると、クラスターBやクラスターHのようにいくつかの家族背景に対して、強くネガティブなイメージや不自由なイメージを抱くグループの存在がみられた。これらクラスターの別による偏見との関連性を検討するため、偏見関連尺度得点の平均値の差を検定したところ、いくつかのクラスター間で有意差が認められ、保育者が抱く家族背景へのイメージが偏見と関連している可能性がある。これらの結果より、いくつかの家族背景に対しては、全体的傾向とは異なる保育者ごとのイメージの存在が示唆され、そうしたイメージと偏

見が関連している可能性を踏まえて、より適切なイメージの形成に向けた取り組みが必要であると考えられる。

4. 2 実践的課題

多様な背景をもつ家族や子どもが抱える困難を踏まえ、それぞれの人々がより良く生きていくことのできる多文化共生社会の実現に向けて、保育・幼児教育においても保育者の知識やスキルの向上が必要である。そのための取り組みの一つとしてアンチバイアス教育 (Anti-Bias Education) がある。アンチバイアス教育は、アメリカにおいてダーマン・スパークスらが幼稚園での長期にわたる協同研究の成果として開発したもので、乳幼児の自己概念の発達と偏見をもたせない保育の目標が整理されている⁽¹²⁾。アンチバイアス教育は、「人格 (persona) や社会的アイデンティティ、自分と異なる人々との社会的・情緒的關係、偏見、差別、批判的思考 (critical thinking)、公正さのための行動などの問題を子どもたちと一緒に取り上げることを含むアプローチ」と定義される⁽¹³⁾。そして、大人や教育者が反偏見の意識をもち、特定の人々が抑圧される枠組みの理解とそこからの脱却が重視される。反偏見の意識を子どもたちに醸成するためには、大人や教育者の役割は大きい。重橋⁽¹⁴⁾は、幼児教育・保育の場における教育者・保育者の障害児の関わりから、子どもたちは偏見や差別を形成、あるいはインクルーシブな視点を身に着けることを指摘しており、このことは障害児への関わりだけでなく、外国につながる人々、貧困、虐待、あるいはそれ以外の背景をもつ人々への関わりに共通するといえるだろう。ゆえに、保育者においても家族や個々人の属性にある差異への適切な理解をもち、差異に対して偏見や固定観念をもたないことが求められる。

アンチバイアス教育においては、大人自身が自身のアイデンティティや文化的背景への理解を深め、固定観念や偏見の影響を認識しながら、同僚や家族との対話を深めていくことが求められる⁽¹³⁾。こうした態度は「批判的思考」を含むものとして整理することができるだろう。道田⁽¹⁵⁾の整理を踏まえると、批判的思考とは、合理的で反省的な思考により、何らかの活動に携わる態度や技能を指す。このような批判的思考を保育者に醸成することが多文化共生社会の一助になると考えられる。アンチバイアス教育の定義のなかにも批判的思考というワードが含まれていることはこうした理解を支持するといえる。

批判的思考を育てるうえでは、批判的思考が普遍的な技能ではなく領域固有もしくは主題固有のものであるという指摘⁽¹⁶⁾に留意すべきである。これはたとえば、性差別に関する事象について批判的思考を学び、それに基づく態度を習得したとしても、外国人差別に対して同様の批判的思考に基づく態度が発揮されるとは限らないことを意味する。批判的思考への領域普遍性—固有性に関する知見の整理としては、批判的思考技能自体は領域 (主題) を超えたものだが、特定の文脈で適切に思考が機能するためには領域固有の知識が必要というものであるという⁽¹⁵⁾。

このことを踏まえると、アンチバイアス教育において保育者の学習機会を設ける場合や、異文化理解等の試みを実践するうえで、どのような主題や事例を準備すべきかについてより多角的な検討が必要になるのではないかと考えられる。保育場面においては、外国につながる家族や子どもへの実践事例が数多く報告されているが、そうした事例からの学習は、他の背景をもつ家族や子どもへの関わりを行ううえでの学習転移が困難であるかもしれない。また、本研究でみられたように、保育者がもつ家族へのイメージは個々に多様であるため、保育者が元々もっている家族のイメージによって、提示された実践事例への理解や学びは異なることも考えられる。

多文化共生を目指す取り組みにおいては、配慮すべき点がいくつもあると考えられる。山田⁽¹⁷⁾は、肌の色のような可視的な相違点に基づく差別が強い国や地域とそれとは異なる不可視的差異による差別がみられる場合、それぞれの地域でアンチバイアス教育の実践において配慮すべき点に違いがあることを指摘し、地域の特性や実情にあわせたアンチバイアス教育の在り方を検討する必要性を指摘する。本研究で示された家族背景に対する個々の保育者のイメージの相違を踏まえると、地域の実情に加えて、保育者それぞれの前知識やイメージに基づく配慮も必要であるといえる。困難を抱える家族・子どもを適切に支援するために、保育者の知識や態度、スキルの向上を目指す上では、多様な家族背景に関するイメージを前提として、偏った見方や考え方に繋がることのない学びの機会を設けることが重要だろう。

4. 3 本研究の限界

本研究では、多様な家族背景をもつ子どもへの保育者のイメージを調査するためにアンケート調査を実施したが、いくつかの課題がある。ひとつには、自記式アンケートによる調査であるため、保育者のもつ顕在的な態度を測定するに留まっている点が挙げられる。家族に対するイメージは言語化しにくく、より社会的に望ましいと考えられる回答を導きやすい側面があるため、アンケート調査の測定では十分に現実の姿を捉えられていない可能性がある。今後の調査では、潜在的な態度の測定や、実際の保育活動場面での観察調査も必要だろう。課題の二つ目として、本研究では、SD法の項目を因子分析により2元的に捉え直したため、本来のイメージの多様性を十分に捉えきれていない

可能性がある。本研究と同様のデータを用いて、SD法項目を合成得点とせず単項目で検討した分析⁽¹⁸⁾では、より複雑なイメージの様相が示唆されている。家族背景へのイメージが偏見や差別につながる可能性を踏まえ、より詳細にイメージの内容を検討することで、イメージの内容とその変容可能性を探ることができるだろう。それにより、困難を抱える家族や子どもに対して保育者がより良い実践活動を実現するための取り組みの一助になるのではないかと考えられる。

引用文献

- (1) 日本保育協会. (2009). 保育の国際化に関する調査報告書.
- (2) 秋田喜代美. (2016). 「貧困と保育」が照らす世界：子どもの育ちを豊かにする保育への一步を. 秋田喜代美・小西祐馬・菅原ますみ(編), *貧困と保育：社会と福祉につなぎ、希望をつむぐ* (pp.7-24). 京都：かもがわ出版.
- (3) 井上寿美・笹倉千佳弘. (2018). 精神疾患を有する母親の子育て支援をめぐる支援者の姿勢：精神科医による患者支援姿勢の検討をとおして. *大阪大谷大学紀要*, 52, 43-56.
- (4) 堀田正央. (2014). 多文化保育・教育とは何か. 咲間まり子(編), *多文化保育・教育論* (pp.9-18). 岐阜：みらい.
- (5) 大場幸夫・民秋 言・中田カヨ子・久富陽子. (1998). *外国人の子どもの保育：親たちの要望と保育者の対応の実態*. 東京：萌文書林.
- (6) McKown, C., & Weinstein, R. S. (2002). Modeling the role of child ethnicity and gender in children's differential response to teacher expectations. *Journal of Applied Social Psychology*, 32, 159-184.
- (7) Guo, L., & Zhou, M. (2008). Study on English teachers' bias towards students of different genders. *Sino-US English Teaching*, 5, 44-7.
- (8) 満下健太・井出智博. (2018). SD法による子どもの多様な家庭的背景に対するイメージの比較検討. *福祉心理学研究*, 15, 63-70.
- (9) 麻喜総一郎. (2010). 家族イメージと青年期における不適応傾向との関係について：形容詞評定尺度の構成をとおして. *家族心理学研究*, 24, 16-29.
- (10) 向田久美子. (1998). 子どもの偏見に及ぼす親の影響について. *性格心理学研究*, 6(2), 82-94.
- (11) Tucker, L. R. (1996). Some mathematical notes on three-mode factor analysis. *Psychometrika*, 31, 279-311.
- (12) 松尾知明. (2013). *多文化教育がわかる事典：ありのままに生きられる社会をめざして*. 明石書店.
- (13) Derman-Sparks, L., LeeKeenan, D., & Nimmo, J. (2015). *Leading anti-bias early childhood programs: A guide for change*. New York, USA: Teachers College Press and NAEYC.
- (14) 重橋史朗. (2018). 幼児教育・保育の場における合理的配慮の課題. *教育と医学*, 66(11), 48-56.
- (15) 道田泰司. (2003). 批判的思考概念の多様性と根底イメージ. *心理学評論*, 46(4), 617-639.
- (16) McPeck, J. E. (1990). *Teaching critical thinking: Dialogue and dialectic*. New York: Routledge.
- (17) 山田千明. (2006). 乳幼児期における多様性尊重の教育：アンチバイアス教育を手がかりとして. 山田千明(編), *多文化に生きる子どもたち* (pp.102-133). 東京：明石書店.
- (18) 白神敬介・岡本和花. (2021). 外国につながるのある子どもに対する保育者のイメージ. 日本発達心理学会第32回大会発表論文集.

付記

本研究は日本学術振興会科学研究費補助金（若手研究(B)，課題番号17K17744）の助成を受けて実施した。

Childcare Workers' Images of Children with Specific Family Backgrounds

Keisuke SHIRAGA* · Kazuka OKAMOTO**

ABSTRACT

This study investigated the images of diverse family backgrounds constructed by childcare workers and examined the relationship between image bias and prejudice. The survey encompassed impoverished families as well as family units that were abusive, bereaved, included mentally ill parents, or hailed from international contexts. The semantic differential method was used to measure the images expressed by participants in the questionnaire. The results revealed that all the family backgrounds tended to be negatively perceived in relation to the image of the ideal family context. Poor families and those with international backgrounds were generally perceived as free and carefree, while abusive families were believed to be inconvenient and strict with rules. The cluster analysis of individual image differences confirmed the existence of groups with images that differed from the overall trend and were associated with prejudicial attitudes. In addition, the study discussed the challenges of fostering critical thinking and the necessity of considering the diversity of images harbored by childcare workers in promoting childcare practices such as anti-bias education.

* School Education